

産地の研究室から/地域ブランドを育てる(4)

リレ一随筆

花き=ブーバルジア

(東京都農業試験場大島園芸技術センター

栄森弘己)

はじめに

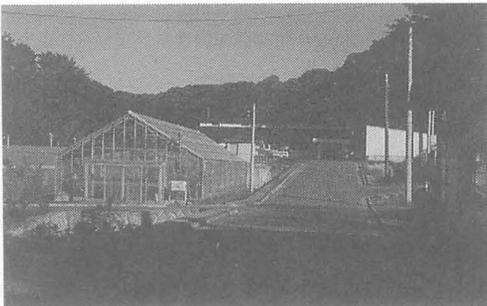
東京から南西に約112km離れた洋上に位置する伊豆大島は、古くから花の産地として切り花類を中心とした花き園芸が盛んなところである。島の面積は伊豆諸島最大で、人口は約1万人、400戸あまりの農家が農業を営んでおり、花き園芸は島の経済を支える重要な産業の一つとなっている。本土との交通は、羽田空港からの空路と、東京の竹芝桟橋や静岡の熱海からの海路などによりつながれている。花の出荷も大部分が海上輸送により、関東や関西、または東北方面へ送られている。

一方、当センターは、昭和13年東京都大島農事試験地として設置され、昭和19年大島支庁に業務移管、昭和63年農業試験場へ移管され、名称も大島園芸技術センターとなり現在に至っている。研究テーマは、主に地元の花き園芸に関連した試験研究を行っている。

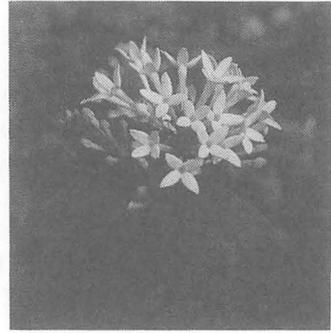
ブーバルジアってどんな花?

島外から視察に来た見学者に島の農業を紹介する際、ここではブーバルジアを一番多く出荷していますという説明をすると、決まって「それってどんな花ですか?」と聞かれる。ブバルディアやブバリアなどと呼ばれるこの花は、主に業務用で消費され花屋で見かけることが少ないせいか、一般的には知名度が低い。用途は主に切り花としてブーケ、花束、盛り花などに幅広く利用され、特に結婚式で好んで使われるそうである。

分類上はアカネ科 *Bouvardia* 属に属し、中南米原産の半耐寒性低木類の仲間である。花は写真のように細



大島園芸技術センター施設と本館(奥)



ブーバルジア(開花したチェリーピンク)

かな管状花が茎先に多数つき、総状をなしている。原種は約30種あり、一重咲、八重咲や大輪系の品種もあり、花色は白、赤、ピンクなどがメインである。

ブーバルジアの栽培概要

この花は、挿し芽で増殖する栄養繁殖性で、一度本圃に定植すると電照とシェードの開花調節により周年栽培が可能である。宿根性なので、一度収穫してもまた株元から新芽が出、年2~3回花の収穫ができ、2~3年据置き栽培される。通常は春に親株から芽を採り、これを床に挿し育苗し、その発根苗を本圃に定植する。短日条件で花芽分化するので、短日期には夜間電照、長日期にはシェード処理などを行い、出荷時期に合わせて開花させている。本圃を更新する際は、据置き株から芽を採り、これを育苗して次作に使用する。品種はハイブリッド系のチェリーピンクを主体に、ホワイトやセミダブル等多様である。

産地発展の経緯と現状の課題

現在、伊豆大島の農業粗生産額は12億円あまりであり、ブーバルジアはその20%程度を占め、この島を代表する基幹作物となっている。栽培の始まりは1933年頃であったが、当時は試作程度であった。1960年代にビニールハウス栽培が始まり、またシェード栽培技術の確立と相まって、1970年頃には花き生産の柱となるまでに至った。さらに白花大輪種で枝変りの優良系統の選抜やハイブリッド系統の導入などを経て産地も大きく発展し、1980年代初めに生産量は頂点に達した。しかし以後は、各種障害の発生や価格の低迷などにより、生産は横ばいないし下降に向かいつつある状況となっていた。

現場では連作障害の問題が一番の悩みのタネとなっている。ネコブセンチュウ類などの土壌病害虫が主因であるが、土壌消毒を行ってもすぐ株落ちが発生して



ブーバルジア（開花したチェリーピンク）

しまうケースも多い。現在、当地の土壤消毒は臭化メチル剤の施用が主流であるが、代替薬剤の検討をも含めた連作障害対策の技術確立は急務となっている。現場では、薬剤による土壤消毒のほかに土壤改良剤の施用や他の作物との輪作などの方法も導入され始めている。

また農家の高齢化が進む中、ブーバルジアは栽培管理労力が比較的にかかるうえ、コナジラミ類やハスモンヨトウなどの害虫が常発し、防除作業にもかなりの労力をかけなければならないことも重なり、フリージアや他の球根切り花、トルコギキョウなどに作付けが代わる所もみられる。これら現場で直面している問題に対し、当センターが行っている最近の課題のいくつかを紹介する。

ウイルスフリー苗の普及

1980年頃からウイルス病が発生するようになり、1985年頃にその発生が島内各地で顕著になった。この花は栄養繁殖性であるので、挿し芽を取る親株自体がかなりの割合でウイルスに汚染されてしまい、汚染苗による生育不良や品質低下が問題となった。そこで、東京都では1988年より関係機関が一体となってウイルスフリー苗の増殖配布事業をスタートさせた。当センターは、農業試験場本場で茎頂培養により作出され

たウイルスフリー苗の原々種の増殖、ウイルスや生産力の検定及び農家への原種苗の配布を担当している。チェリーピンクとハイブリッドホワイトの2品種を扱い、現場では従来の株よりフリー株は生育が旺盛となり品質も向上することが確認された。配布事業は軌道にのるかに見えたが、ここである問題が発生してしまった。

事業で配布したハイブリッドホワイトという白花の品種で、配布先の農家の一部で花が奇形となり、出荷もできないほどの被害が発生した。そこで至急奇形花の原因について検討した結果、ウイルスなどの病害に起因するものではなく、苗の遺伝的要因によるものと結論された。つまり配布した苗の中に花が奇形となる個体が含まれていたことによるものであった。奇形個体がもともとなのか、培養変異であったのかは定かではないが、以後当センターでは原々株の開花選抜を徹底させ、トラブルの解消を図った。苗の配布は、現在順調に継続され現場に普及しているが、種苗配布の難しさを強く実感させられた。

新たな試み

ウイルスフリー苗は、現地で再びウイルスに汚染されることが懸念される。伊豆大島のブーバルジアに発生しているウイルス病は、キュウリモザイクウイルス（以下、CMV）に起因することを突き止めているので、当センターでは弱毒ウイルスによる防除法について試みている。すなわちフリー苗にCMVの弱毒ウイルスを感染させ、強毒のCMVによる再汚染を防げないのか検討している。本防除法は試験中であるが、効果が認められ今後さらに検討を進めていく予定である。

連作障害対策の一つとして隔離床栽培法にも取り組んでいる。これは大きなプランターのような容器を施設内に設置し、その中に用土を入れ地面から完全に隔離した形で栽培しようという試みである。本栽培法は土耕の技術がそのまま生かせることや、床内の用土も蒸気消毒などを効率よくできることなどの利点がある。実用性が認められたこともあり、本栽培法が農家に導入され始め、今後の普及・拡大が期待される。